

「昭和26年 中学校・高等学校学習指導要領 外国語科英語編〔試案〕」の史的意義

羽澄直子・両澤悦子*

The Historical Significance of the 1951 “Suggested Course of Study in English for Lower and Upper Secondary Schools”

Naoko HAZUMI and Etsuko MOROSAWA

は じ め に

平成元年3月15日、戦後の新しい学校制度が発足して以来6度目の「中学校・高等学校学習指導要領」が告示された。¹ この平成元年の学習指導要領(以後「現行版」と記す)の「第9節 外国語(英語)」の特徴は、コミュニケーション能力育成を重視する方針をより明確にした点であろう。例えば「目標および内容」のうち、言語活動について、現行版以前の指導要領では「聞くこと、話すこと」、「読むこと」、「書くこと」の3領域に分けられているが、現行版では「聞くこと、話すこと」をそれぞれ独立させて、「聞くこと」、「話すこと」、「読むこと」、「書くこと」の4領域に改められた。高等学校では新たに設置された「オーラルコミュニケーション」A、B、Cのうち、少なくとも1科目履修させることとなった。この新しい学習指導要領に基づいた英語科教育が、従来日本人が苦手としてきた「聞くこと」、「話すこと」の能力の育成にどれほどの効果を発揮できたかということ判断するには、まだ時期尚早であろうが、一方では受験(特に大学受験)での英語の扱い方が変わらない限り、従来どおり文法や読解中心の授業に多くの時間を割かざるを得ないというのが、中学校、高等学校の英語教師の偽らざる意見でもある。

戦後初めての学習指導要領は、昭和22年4月スタートの新学制に間に合わせるように、昭和22年3月20日に急ぎ発表された。そのうち「英語編〔試案〕」(以後「22年版」と記す)は、わずか28ページの小冊子であった。十分な検討期間を持たないまま急場しのぎで作られたもので何かと不備があるものの、注目に値するのは英語科教育の「目標」として掲げられた項目である。

- 一 英語で考える習慣を作ること
- 二 英語の聴き方と話し方を学ぶこと
- 三 英語の読み方と書き方を学ぶこと
- 四 英語を話す国民について知ること、特に、その風俗習慣および日常生活について知ること(『英語教育史資料1』174)

現行版の「目標」(中学校)は次のとおりである。

外国語を理解し、外国語で表現する基本的な能力を養い、外国語で積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てるとともに、言語や文化に対する関心を深め、国際理解

*東京都世田谷区立用賀中学校

の基礎を培う。

このように表現、形式は異なっているとしても、22年版、現行版ともに「外国語の運用能力を身につけ、かつ、言語及び文化に対する知識、関心を深める」という、大筋においては同様の「目標」が定められている。この内容は指導要領改訂ごとにほぼ継承されている。「目標」の内容については、22年版にその原型があると考えてよからう。

さて文部省は、22年版と同様な趣旨のもとに十全な内容の新しい学習指導要領の作成に着手し、4年後の昭和26年7月15日に「中学校・高等学校学習指導要領一般編〔試案〕」を、翌年3月20日には「中学校・高等学校学習指導要領外国語科英語編〔試案〕」を本格的に出版した。この試案こそ戦後の英語教育の出発点と呼べるものであろう。そこで本稿では、昭和26年度の学習指導要領の外国語科英語編〔試案〕(以後「26年版」と記す)を検証し、その史的意義を考察してみたい。

中学校・高等学校学習指導要領外国語科英語編〔試案〕昭和27年3月20日発行

基本趣旨は22年版をさらに深化発展させたものであるが、日英両語で書かれ、3巻構成で全759ページ、まさにオールラウンドな内容の労作で、関係者の意気込みが伝わってくる。しかも主体は英文の方であって、日本文はその要旨説明にとどまっている。これは討議の際に有用たらしめるため、また日本語の不便な英語教師のためとのことだが、英語に関わる学習指導要領とはいえ、日本政府の刊行物の主体が英文で書かれているというところに、いかにも時代背景を感じさせる。また〔試案〕の表現が示すように、22年版同様あくまで手引き、資料として作成されたものである。まえがきには「さらに、この学習指導要領は、どんな意味においても天降りと考えられてはその趣旨に反するのであって、これをそのままの姿で用いることは期待もしていないし希望もしていないのである。教師は望ましいと思われるなら、どのようにも活用していただきたい」と記されており(『英語教育史資料1』462)、戦後の強い反省期にあった政府機関が、上から指針を押しつける弊害を自ら戒めようとする姿勢がうかがわれて興味深い。

理論的背景については、22年版同様パーマー(Harold E. Palmer)の指導理論を下敷きにしてはいるが、教育方法論など、いっそう幅広く追求されている。

以下、その内容について考察を加えてみたい。

(1) 引用、参考文献

全編を通じて、外国人による、約100点に及ぶ研究書の引用、参照が見られる。しかしその年代による分布を眺めてみると、1890年(Henry Sweet, *A Primer of Spoken English*)から1952年(J. Owen Gauntlett, *Practical Speech I, II*)に及ぶものの、うち約80%が戦前、戦中の発行、残りの20%が戦後の発行と、かなりバランスを欠く比率となっている。しかも戦後の参照研究書21点のうち、9点が日本国内の出版である。同時代の研究の趨勢を把握するにはまだ多くの困難が伴う時代であったことが推測される。従って前述のスイートに始まり、文法論のイエスパーセン(Otto Jespersen)、音声学のジョーンズ(Daniel Jones)などを十分吸収し、その応用分野としてのパーマーの外国語習得論、外国語指導法を主軸とした理論構成になっているといえよう。なお文型論については、ホーンビー(A. S. Hornby)の“Verb Patterns”を始めとする一連の型が重視され、付録として転載されている。

(2) アメリカ構造言語学と習慣形成理論

アメリカ構造言語学については、ブルームフィールド(Leonard Bloomfield)の *Language* (1928)以降、ケニヨン＝ノット(Kenyon & Knott)、パイク(Kenneth L. Pike)に及ぶ形でその発展の足跡が把握されている。パイクの *The Intonation of American English* (1945)からは、“Intonation contour”の用語、概念が紹介されている。アメリカ構造主義言語学の大きな特徴は、言語学上の学的効果を応用した外国語教育理論、方法を提案したことであった。

いわゆる習慣形成理論の礎として外国語としての英語教育のバイブル的存在であるフリーズ(Charles C. Fries)の *Teaching and Learning English as a Foreign Language* (1945)も26年版では一応視野に入っていたようであり、例えばフリーズの提案する技法であるミム＝メモ(Mim-mem=mimicry-memorization practice)や、“substitution”、“conversion”、“completion”などについても言及されている。前者は1955年あたりから日本の中学で大いに普及した。後者はパーマーの“limited composition”の主要技法からの引用と思われるが、フリーズの外国語習得論の中核をなすものでもある。すなわち構造的意味に対する自動的な反応を形成させるための技法として提唱された“pattern practice”の最も基本的な形式である。フリーズのオーラル・アプローチ(the Oral Approach)が日本で開花し、普及した昭和30年代を前に、26年版が「パーマーからフリーズへ」のひとつの兆しを見せているといえようか。

(3) Language as CodeとLanguage as Speech

すでに述べたように、26年版の最大の理論的基礎はパーマーである。とりわけ“language as Code”と“language as Speech”の概念分けは現行版に至るまで学習指導要領外国語(英語)の支柱となっている。これはソシュール(Ferdinand de Saussure)の“la langue”と“la parole”に基づいたものである。「言語材料」と「言語(学習)活動」は、ソシュール、パーマーの「学習指導要領版」ともいうべき用語で、現行版に至るまで、日本英語科教育の軸となっている用語、概念である。なおこれは言葉を変えれば“competence”と“performance”であり、「知識」と「運用」である。

(4) WhatとHowおよび教科書

フリーズのWhatとHow(何を教えるかといかに教えるか)の概念も賛意をもって紹介されており、指導技術に関する“How”よりも、教材選択・配列論ともいうべき“What”を重視して、合理的な教材を作成する必要を強調している。新しい6-3制度に対応すべく文部省が1948年に急遽作成した教科書 *Let's Learn English. Book 1-3*は、言語材料への配慮に欠けた、物語中心の構成であった。そこへ登場したのが、その後10年間中学校英語教育界を席卷することになる *Jack and Betty: English Step by Step*のシリーズであった。初版は1948(昭和23)年、以後書名、内容の改定を繰り返し、昭和30年代のほぼ全期間、中学校英語を代表する教科書となった。² 中学校での指導という立場から、英語の文法構造を分析し、教材として望ましい順序に配列するという、アメリカの外国語教育理論を的確にとらえ、当時の日本にしては画期的な企画で作成された。生徒と同年代のアメリカ人中学生、JackとBettyを登場させることは、彼らに英語への親しみを持たせる効果があった。内容は主にアメリカの風俗、習慣、日常生活、ものの考え方についてなどであった。*Jack and Betty*は新制度の中学英語指導に具体的指針を示すものとして、混迷状況を収束させる役割を果たしたといえよう。

(5) 無言消化 (Silent Assimilation)

26年版では「無言消化」を高く評価し、Ⅱ, 5, Aを始めいくつかの箇所実践を勧めている。無言消化とは、新教材を提示、導入する際、十分受容し、消化できるように、学習者にリピート作業を課さず、聴覚受容に集中させるのが効果的とする論である。のちに国際的に高い評価を得た、カリフォルニア大学サンノゼ校 (California State University, San Jose) 心理学教授のアッシャー (J. Asher) の提案する “Total Physical Response” (“Learning a Second Language through Commands: the Second Field,” 1974. *Modern Language Journal* 58 に発表) や、西沿岸防衛語学校 (Defense Language Institute, West Coast) でロシア語を担当していたポストフスキー (V. A. Postovsky) の “Delayed Oral Practice” (“Effects of Delay in Oral Practice at the Beginning of Second Language Learning,” 1974. *Modern Language Journal* 58 に発表) などは全く同様な趣旨に基づく。26年版はこれらよりも約20年も前の提唱であるが、その後日本では継承発展させる動きがあまりみられなかった。

(6) 科目相互間の関連

学課目のひとつである限り、外国語 (英語) も当然他教科との相互関連を考慮すべきであるが、26年版は、すでにこのことを強調している。

社会科との関連はただちに気づくところであるが、ともに言語科目として多くの接点を持つはずの国語科との関連づけは意外に等閑視されているのではないか。本来貴重な情報を交換しうるはずの母語と外国語 (第二語) の教育が、今日に至るも互いにほぼ没交渉であるということは、反省すべきであろう。26年版の記述は今も生きる警告である。同様に体育 (モーター・スキルの問題など)、音楽 (プロソディーの問題など)、数学 (外国語習得に要する思考形態や回路の問題など) との関連も解明する価値があるだろう。

(7) 言語 (学習) 活動の順序と転移

パーマー、フリーズ、その間に存在する指導法理論に共通する要素に、「音声手段により導入すべし」という音声第一主義がある。パーマーは、音声手段による伝達回路が第一義 (the primary speech circuit) であるから、外国語指導も音声手段を最優先すべきと説き、フリーズもほぼ同じ理由で、ラテン語のようなデッド・ランゲージの学習にも音声による導入が効果的であると述べている。

26年版も、指導の大筋として「聞く」→「話す」→「読む」→「書く」を示しているが、明治期から戦時までの英語教育を引き継いだ当時の状況を考えると、これは画期的な提言といえるべきであろう。また「転移」という用語を使用してはいないが、「聞き方」が後の作業の基礎となること、つまり「聞き方」の学習で得た能力が他の領域へ役立つような配慮をするよう促している。

(8) 翻訳、和文英訳

26年版の内容構成は、必ずしもわかりやすいものではないが、和文第5章に「和文英訳」の項があり、次の記述がある。ついでながらこの件については、なぜか本編である英文編での記述は少ない。

「英訳は原文のだいたいの意味を伝えればいいので、逐語訳をして英語が不自然になったり和臭をおびたりするのはよくない。できあがりの英語がよいということのほうが、原文

に忠実であるということよりはるかに大切である。よく誤解されることは、ある国語で表現されたものが他の国語に一字一句一節再現できるということである」

「和文英訳というものは、英語に熟達したときのみ、熟達した程度にできるもの」

「翻訳は、実際翻訳される国語で考える習慣を助長し、自然な英語で自由に表現する習慣を妨げる」

「旧来の翻訳指導法が、不自然な英語、不自然な日本語を用いる『達者な』翻訳家を作り出す」（『英語教育史資料1』560-61）

皮肉も交えた「翻訳」への的を得た警鐘である。これは「英文和訳」についても当てはまることである。日→英、英→日、いずれの方向であろうと、一対一の対応であますことなく内容に移し変えることを究極の目標とするならば、和文英訳、あるいは英文和訳の作業の際、学習者が言語直観を有する母語で思考するのは当然であろう。昭和26年の時点ですでにこのような見解が見られることは高く評価できる。

(9) 学習活動の紹介

26年版には、全編を通じて多くの学習活動の事例が紹介されている。例えばピッツバーグ大学 (University of Pittsburg) のポールストン (Christine B. Paulston) とブルーダー (Mary N. Bruder) が提案した M M C Drill というドリルの展開形式がある。M M C とは、著者たちのいう “mechanical-meaningful-communicative (drills)” の頭文字で、ドリルを、①構造パターンに習熟するための機械的な操作活動→②一定の型や指示に従うが、実際の言語行動に近い活動→③コミュニケーション行動としての言語行動またはそれに限りなく近い活動、という区分を立て、教室での作業が現実の言語行動へとつながる工夫を提案している。これは “pattern practice” を中心とする操作的な学習の効果は、実際のコミュニケーションの場で効果的に作動しないという批判に答えるものであり、さらに言えば最近注目の学的成果である “communicative competence” の養成を狙うものである。

このようにコミュニケーション重視を唱える現在の趨勢を先取りするような活動を提示する一方、アメリカの教育書を底本としたせいか、日本にはなじみにくいアメリカ的な活動の紹介も目につく。例えばあるプロジェクトにクラス全員で取り組む、演劇や歌などを上演する英語学芸会の準備、クラス議会の結成など、戦後まもない日本の教育現場では受け入れや実践が困難なものなどが多々見うけられる。

結 び

26年版の「学習指導要領外国語科(英語)編〔試案〕」は、22年版に比べて内容的に格段に充実し、政府刊行物というよりも、啓蒙書、研究書と呼べるような内容である。戦後初の本格的な英語教育研究書といってもよからう。

約100点の文献に基づいて、英語教育のほぼ全ての分野、領域を網羅しており、当時の英語科教師、特に中学校の担当者には極めて有用な指針、資料として役立ったに違いない。26年版の内容を具現する形の中学教科書として *Jack and Betty* のシリーズが出版され、広く使われ、現場での具体的な拠り所として大きな存在となった。

このように観察すると、26年版の日本英語教育における意義は、次のような点で極めて大きいといえよう。

- ① 戦後初の英語教育関係の実質的な研究書として、啓蒙的な役割を果たし、かつ後の英語

教育研究への刺激剤として、大きな道を開拓した。

- ② 日本英語科教育が戦後の混迷期を脱出し、安定の時期に向かう大きな原動力となった。
- ③ 多くの事項について、後の学習指導要領の用語、考え方などの原型となった。

注

1 戦後の学習指導要領は現在までに、昭和22年3月22日、昭和26年7月10日(外国語科英語編は昭和27年3月20日)、昭和33年10月1日、昭和44年4月14日、昭和52年7月23日、平成元年3月15日と、計6回発表または告示されている。

2 *Jack and Betty* のシリーズは、まさに衝撃的な教科書として出現。改訂を繰り返し、きわめて息の長い教科書であった。

<i>Jack and Betty : English Step by Step</i> , 1st-3rd step	1948
<i>New Jack and Betty : English Step by Step</i> , 1st-3rd step	1950
<i>Revised Jack and Betty : English Step by Step</i> , 1st-3rd step	1953
<i>Standard Jack and Betty . English Step by Step</i> , 1st-3rd step.	1955
<i>New Edition Jack and Betty · English Step by Step</i> , 1st-3rd step	1957
<i>Standard Jack and Betty : English Step by Step</i> , 1st-3rd step	1961

参考文献

- 伊藤健三、伊藤元雄、下村勇三郎、関典明、渡辺益好『英語の新しい学習指導』リーベル出版、1995。
- 伊藤健三、伊藤元雄、下村勇三郎、渡辺益好『実践英語科教育法』リーベル出版、1985。
- 伊村元道、若林俊輔『英語教育の歩み：変遷と明日への提言』中教出版、1980。
- 大村喜吉、高橋健吉、出来成訓『英語教育史資料』1-3 東京法令出版、1980。
- 川澄哲夫編『資料 日本英学史』全3巻、大修館書店、1978。
- 国立教育研究所内戦後教育改革資料研究会『文部省学習指導要領 19 外国語科編(1)』日本図書センター、1980。
- 『文部省学習指導要領 20 外国語科編(2)』日本図書センター、1980。
- 財団法人語学教育研究所編『英語教授法事典』1962、開隆社、1981。
- 塩澤利雄、伊部哲、大西光興、園城寺信一『新英語科教育の展開』英潮社、1994。
- 田辺洋二『学校英語』筑摩書房、1990。
- 出来成訓『日本英語教育史考』東京法令出版、1994。
- 中田康行『学校文法から始める英語学』晃洋書房、1994。
- 日本の英学100年編集部『日本の英学100年 昭和編』研究社、1969。
- 萩原恭平、稲村松雄、竹沢啓一郎. *Jack and Betty · English Step by Step* 1st-3rd step 開隆堂、1948。
- . *New Edition Jack and Betty English Step by Step* 1st-3rd step. 開隆堂、1957。
- . *New Jack and Betty : English Step by Step* 1st-3rd step 開隆堂、1950。
- . *Revised Jack and Betty : English Step by Step*. 1st-3rd step. 開隆堂、1953。
- . *Standard Jack and Betty : English Step by Step* 1st-3rd step 開隆堂、1955、1961。
- 平泉渉、渡部昇一『英語教育大論争』1975、文藝春秋、1995。
- Ministry of Education, ed. *Let's Learn English Book* 1-3. 1948。
- 和田稔編著『外国語(英語)科の解説と展開』教育開発研究所、1988。